

平成30年度第30期川崎市青少年問題協議会  
第3回協議題・調査専門委員会会議録

○日 時 平成31年1月30日（水）10時00分～12時00分

○場 所 第3庁舎 11階会議室

○出席者

(1) 委員 6名

協議題・調査専門委員：芳川委員長、香山副委員長、藤田委員、高村委員、  
新井委員、前川委員

オブザーバー：岡田会長

(2) 傍聴者

なし

(3) 事務局

佐川室長、箱島担当課長、北村担当係長、菊池職員

○配布資料

資料1 第1回及び第2回協議題・調査専門委員会における意見まとめ

資料2 第30期川崎市青少年問題協議会協議テーマ調査票

資料3 事務局提供資料

資料4 協議テーマ調査票一覧

資料5 第30期川崎市青少年問題協議会 協議スケジュール

参考資料 第2回協議題・調査専門委員会会議録

1 開会

- ・配布資料確認
- ・会議公開についての説明

2 議事

(1) 第30期川崎市青少年問題協議会協議題について

芳川委員長：今回3回目の会議ですので、次の全体会に向けて、具体的にテーマが決められるようにしていきたいと思います。

まず、前回、もう少しテーマの話題を広げてみてはどうかということで、再度、皆様からさまざまな意見を提出していただきました。それをまとめたものが資料2です。では、作成していただいた委員に、順番に説明をお願いいたします。

高村委員：自分なりに気になっていることを書きました。1つ目は、青少年のコミュニケーションツールが非常に発達していて、それらに規制をかけること、注意を促すことについてはいろいろ言われていますが、それらを有効利用していくことに関してはなかなかやっていない。子どもたちはこういう様々なツ

ルを使って何かをしているのに、我々は全く知らないというのではまずいで、調べて、規制だけでなく使い方を考えさせる、そういう手だてもあるのではないか。そんな思いで1本目を出させていただきました。

2本目は、前回、岡田会長がカワサキハロウィンについてお話をされて、若い人や、中高生の参加はどうなっているのかということと、それを促していく、例えばブースを与える、考えさせるということがあったら、若者たちがエネルギーを持って活動できるのではないか。それから今、eスポーツがすごく盛んになっているので、その実態を知り、何か起こしていくというのも青少年が食いつくのではないか。具体的にこれというのがありませんが、自分で感じたことを書きました。

芳川委員長：今日は、大草委員がお休みですので私から紹介します。協議テーマは、インターネットを使った人間関係はどうか、ネットヒューマンリレーションという言葉がキーワードの中に出されており、公的機関が運営するネット上の掲示板、それを運営できるのかどうかわかりませんが、確かにそういうものはないと。つまり、コミュニケーションにリレーションという関係の構築の中で、ネットを使ってどう伝えるのか。それが1つのキーワードになっているようです。

前川委員：私は、やはり青少年の居場所なのかなと考えています。ただ、青少年の居場所が必要と思っているのは我々だけなのかもしれないし、もしかしたら中高生も居場所が必要と思っているのかもしれない。それがまだ私自身もわからないということがあります。必要だといっても、おそらく市内の土地の状況を鑑みると、今後は新しい場所は無理なのかなと。ただ、それは新しい場所を求めるのではなく、むしろソフト面、何が必要とされているのかを考えることが実はハード面を克服できるという気がしています。実は、これ考えるために散歩をしてカフェに行きましたが、カフェには中高生が多くいることに気づかされました。そこで勉強している中高生は多いのですが、例えばそういうところも1つの居場所として考えるのであれば、それはそういう機能を果たしているという考えもあります。とすると、必要なソフト面、必要な機能は何かということをもう1度考えて、その中でまちづくりという視点を据えていくと、いろいろなテーマが包摂できるように思っています。

市民文化局では、希望のシナリオというような施策を打っていて、その中に青少年の居場所も全て包摂するような施策というようなことを聞いていますので、そういう意味でも、青少年に対して他の市民が望むこと、それから青少年が逆にまちに望んでいることというものを全てを包摂した形で、何か新しい場所、機能を考えていけるといいなと考えました。

新井委員：今言われているSNSというものは、コミュニケーションの道具にすぎないと思います。これは目的でなく手段であって、我々が青少年問題について考

えるのは、青少年というのが社会から隔絶されたものでなく、社会の中の関連した一員であって、その中で垣根を低くして、青少年と大人が行ったり来たりできる、そういう仕組みができれば、青少年ももっと社会に参加しやすくなる。逆に、社会の方も青少年をうまく取り入れていくことによって、うまく回っていくのかなど。どうやったら青少年の参加ができるかという仕組みを考えたらどうか。その中で、あくまでもコミュニケーションのツールとしてITやいろいろなSNSを勉強しながら、最終目的は青少年の社会参加の仕組みづくりをどうしていくかという視点で考えました。

芳川委員長：視野を少し広げていただきまして、AIやSNSは1つのツールであり、それを含めてのコミュニケーションを、青少年の社会参加を促す仕組みの中でも考えてみるというところですね。

香山副委員長：昨年度までの取組みを継続しながらより具体的なもの、という考え方の方向性は変えないでいこうと思いました。特に、あくまでも私見ですけれども、できれば、青少年世代の社会貢献の具体的な活動を見据えていけるような何かしらの研究、協議ができればいいと思います。

課題として、皆さんから御指摘がありましたけれども、青少年世代の組織化の難しさが1つ。それから、そういった世代パワーを受け入れる大人側の受け入れる組織、機会、計画などの整備の難しさ、その2つが挙げられます。その両方を並行して研究、協議し、ゆくゆくは青少年が自ら持っている貢献したいという意欲、それを具現化できる道が開発していければいい。

今、他の意見を聞いていて、例えば大草委員のネットヒューマンリレーション、前川委員の居場所というのも、そういった青少年側の組織化の重要な要素になっていくだろうと思いますし、それから、新井委員がおっしゃっていた青少年の社会参画ということは、私の方向性と全く同じだと思います。

芳川委員長：前回の会議で、もう少し全体会に向けて具体的なものを、ということで今回皆さんに広げていただきました。

次に、調査票に書いていただいた様々な資料を事務局に用意してもらいましたので、説明をお願いします。

・事務局より、資料1、資料3を説明

芳川委員長：では、討議に入る前に、資料についてもっと知りたい、あるいは質問などがあれば、いかがでしょうか。

資料3-④に、「(仮称) ソーシャルデザインセンター」という言葉がありますが、それはどういうものですか。

事務局：まだ仮称として、イメージ的なものですが、今、例えば市民活動センターや、

社会福祉協議会など、そういった市単位の間接支援組織みたいなものは用意されていますが、もう一歩下がって、区域レベルの新しい仕組みづくりということでこのソーシャルデザインセンターができています。具体的にここで何をやるのかというのはないのですが、1つ大きな役割としては、つなぎ役、コーディネート、その機能のところが大きく注目されているというところですね。コーディネート機能というのは、簡単な言葉ですけども、それをやる担い手や、実際にどうやっていくのかというのは決まった方式はないので、課題もあるとは思いますが。

前川委員：全市のシンポジウムと、区単位の検討会議、どちらも出ささせていただきましたが、このソーシャルデザインセンターの名前がよくわからないという話が出ていました。つなぐ機能は必要だろうけれど、どうやったらつなぐかというのは非常に難しいと思います。この市民創発という考えがイメージとして湧かない、まだ腑には落ちないという部分があります。

事務局：このコミュニティ施策につきましては、理念が先に来ていて、どういうふうに入っていくのかというのは多岐にわたっていて、子ども・若者だけでも、高齢者だけでもなく、おそらく各局にまたがる基本的な理念や考え方があり、それをどう市内で推進していくのかが課題の1つだと思っています。もう1つの課題は、これは市民の方と一緒にやっていくことであり、市民の方としっかりとやりとりしながら考え方を共有していくことが大切だと思うので、いかにしてみんなと共有していくかということだと考えています。

芳川委員長：皆さん、そろそろよろしいでしょうか。

それでは、今回の会議の前に事務局と打合せをして、協議テーマ案を作成しましたので、配布いたします。

今回は、コミュニケーション、居場所、社会参加という3つのキーワードが提示されました。今回の意見を、コミュニケーションに係る部分、居場所づくりの部分、あるいは社会参加の部分など、おおまかに整理をしていくと資料4のような形になるかと思っています。

さらに、第1回、第2回の会議、そして今回の調査票を踏まえると、やはり社会参加というものが共通したキーワードになると思いますので、社会参加をキーワードにしながら、また、実際にボランティアという部分もあり、それをつなぎ合わせながら、青少年の社会参加で、ハロウィン、eスポーツ、YOSAKOI、それらのイベントは青少年たちが主体的に何かやりたいとあって始まり、参加している活動のようですので、そういう主体的にボランティアに参加するためにはどうしたらいいのかという方向性で協議テーマを考えていくと、それぞれ私たちが挙げたものが1つにまとまると思います。青少年の社会参加、主体的なボランティア活動とすると、その中に、ネット

リレーションが本当にできるのかどうか、あるいはeスポーツ、YOSAKOI、ハロウィンはどうなのか、そこを検証しながら考えていくとなると、ちょうどみんなのイメージがつながってくるのかなと思いましたが、いかがでしょうか。

ここから先は、協議テーマを考えながら、自由にディスカッションしていきたいと思います。キーワード的なものだけ提示していますので、できればそこから展開していけたらいいのですが、いかがでしょうか。

考えていただいている間に話題提供をすると、ちょうど大学の私のゼミに、YOSAKOIが大好きな学生がいて、大会がある度に、いきいきとして参加してきます。それを見ていると、大会への参加というのが青少年たちにとってとても意味があるのだろうと。eスポーツもハロウィンも、そしてYOSAKOIも、何かそういう若者の主体的な参加の秘密があるのではないかと思わず考えたくなくなってしまいますね。

また、先週は、久里浜医療センターに行ってきました。そこで青少年のネット依存、ゲーム依存について、治療をしているワーカーの方の話を聞いて、プログラムを見学しましたが、あそこで目指しているのは軽減です。つまり、ゲームあるいはネットを使う時間を軽くしましょう、と。つまり、これからの社会、インターネットは絶対なくなるので、ならば生活とどう共存させるかということ、プログラムの中で子どもたちに話をしていると。共存しながら、いい使い道をしながら、人生の中に過度に入り込まない形でやっという話を聞きました。

藤田委員：それと関連して、実は、昨日まで四国少年院に2日間見学に行っていました。その時に、院長さんから伺った話ですが、その方はその前に別の施設にいらっやって、その管轄で非行の多い地域・少ない地域を調べたら、お祭りが盛んな地域は非行が少なく、そうでない地域は非行が多いことに気が付いたそうです。岡田会長が以前おっやっていて、お祭りが重要だということに改めて気づきましたが、これはお祭りである必要は実はなくて、何らかの形で自分が社会に開かれている、社会とのつながりを持つところがあればよく、そうすると、お祭りやハロウィンに参加したい子もいれば、ネットゲームで遊びたいという子もいる。でも、そのネットゲームも個人で遊ぶだけでなく、例えば何か大会があって、学校代表にその子になると、社会に開かれることになると思いますので、何らかの形でいろいろなチャンネルがあると、社会とつながれることになるのかなと思っています。

ですから、先ほどの皆さんのお話を聞いていると、社会参加というものに多様なチャンネルをどう準備して、こちらがそれを、それも社会参加だときちんと認めていく、そういう仕組みができると今までは社会参加とみなされていなかったものも、これでいいのか、それはネット依存の子も、もしかするとネットだけじゃなくて、友達ともしゃべるようになるかもしれない。より多くの人を、という包括性や、多様性、そういうものをどう社会が準備で

きるか。さらに、継続性をも担保するような、多様なチャンネルを川崎市がどう準備できるのか。それを考えるテーマであれば、皆さんの意見がつながっていくと思います。

さらに、全ての子どもとつながっているのは学校なので、何か学校ともつながりながら、そんなことができると思います。川崎市内の学校単位のeスポーツ大会とか、あるいは、自分たちの学校区でいいものをネット上にアップしてみんなで投票してどれが1番になるかとか、これは例えですが、いろいろな子がいろいろな形で参加できるような、それも学校から子どもたちに、規制だけでない肯定的なメッセージを発していく。教育的なものがたくさん降りかかると子どもは嫌になるので、そうではない形で何か活動を通して肯定的なメッセージが伝わればいいと思います。

芳川委員長：先ほども言いましたように、協議テーマ案は、みなさんのこれまでの意見を3つのキーワード、コミュニケーション、居場所、社会参加とまとめていて、取捨選択ということよりも、やはり青少年の社会参加を大きなテーマにして、藤田委員から、包括性と多様性と継続性をいかにその中でつくっていくかが大事ではないかという御意見がありましたので、包括性、多様性、継続性という観点も取り入れて、別の参考になる事例を見学や検証をしながら、川崎ではどうなのかまとめていくという、そんなイメージがあります。

前川委員：御意見を伺いながら、いろいろ思い返すことがありました。今、私は高津区の地域教育会議、中学生会議に関わっていて、それは5校ある中学校の各校の生徒会メンバーを集める会議ですけれども、僕も中学生の時に委員をやっていて、今までの約20年間ほぼ学校のことをずっと考え続けてきました。私も担当になってから、多分今年も学校のことが何か出のかなと思っていたのですが、今年大きな方向転換をして、地域と学校のかかわりをもっと考えたいという声が彼らから出ました。

なぜそういう声が出たのか全くわからないのですが、要は、地域の人から自分たちがどう見えているか全く私たちはわからない。どう見えていると思うかと聞いたら、悪く見えているだろうと。多分そんなに悪く思われていないと私は思いますが、彼らの中ではそう思っている。3月には地域教育会議の方をお願いして、とにかく皆さん舞台に上がって自分の学区と中学校、それから地域のかかわりをたくさん話して褒めよう、という会を開く予定ですが、これはもしかすると中学生たちも何か地域に貢献したい、そういう思いがあるのかなというのは、その時に感じました。

また、先週の日曜日に、川崎市の子ども集会があり、そこでフリートークのコーディネーターをやらせていただいた時も、理想の川崎というテーマで、今の川崎の良いところ、悪いところを考えてみて子どもたちに投げってみると、良いところがたくさん出ました。子どもたちにとってすごく川崎は住みやすいまちになっているというのがとても印象的でした。すごく川崎が好き

なのにもかかわらず、他都市から見た時に、何か川崎って、公害があったり、不良が多かったり、そういうイメージがあるのが非常に嫌だと。それを変えたいという形で、今子ども会議でも川崎の良いところをアピールする方向でやっています。これは、おそらく何かしら自分が社会に貢献したい表れだと思いますし、彼らがこの活動している上で何か楽しさがあるのだろうとも思います。

私自身もずっと長く子ども会や子ども会議をやっていて、やはり楽しいからやっています。辛かったらやりません。その楽しさの中には、各子ども会の役員の方皆さんから褒められたり認められたりすることや、何かを活動していく中で自分がこれだけ頑張ったという成果が出るのが楽しさにつながっていると思います。

ですから、主体的に活動するためには何か認めていただける大人の皆さんの存在が非常に大きいのかなという気がしています。私はそういう大人の皆さんに恵まれてきたから、今日もここにいられるのかなと、そういうふうに思います。さきほど、藤田委員から、包括性と継続性の問題が出ましたけれども、今、こども会とこ文の連携事業を進めていて、私もそれに携わっていますが、職業としてこども文化センターの職員をやられているのと、我々子ども会のボランティアでやっているのは、意識がはっきりと違って、活動を継続していく中で職とボランティアの連携ってすごく難しいというのが最近わかりました。職員は、責任や、子どもたちを守らなければいけない立場であり、ボランティアももちろんそこは考えるけれども、それ以上にまず来た子たちを楽しませるという優先順位のつけ方の違いだと思いますが、何かそのあたりが明確になると、より継続的に、職業としてもできますし、ボランティアとしてもお互いつながられると思います。

新井委員：私は、社会福祉協議会のボランティア団体関係の委員にもなっていて、この間もその会議があり、何のためにボランティアをやるのかという話になりました。あまりかわり過ぎるとかえって負担になって、それで途中で続かなくなってしまうと。ボランティアってどう考えたらいいかという中で、やはりボランティアは活動を通しての自分づくりじゃないかと。要するに、ボランティアが目的じゃなくて、自分をつくるための1つの手段であって、青少年にとっても、ボランティアをしていると彼らの社会参加のための1つのツールじゃないかなと思います。

藤田委員がおっしゃったように、青少年はいろいろな方法で自分をつくっていかなければいけないので、そのためにどうすべきか、こういう方法や手段もある、ということ促していく。そういうテーマにしたらどうでしょうか。ボランティアというのは今、非常に大事なことで、どう関わっていくかという大事な問題でもあるけれども、大人も子どもも含めて日常生活を送っている中で、実際にはボランティアよりも、それ以外のことに関わっている時間が多く、それ以外で人間形成をする部分が多いと思います。ボランティ

アもあるけれども他もある、というふうにできたらいいなと感じました。

芳川委員長：新井委員のおっしゃるとおりで、ボランティアについて調べたいわけではなく、むしろ、主体的に参加する何か。ペイも何ももらわなくて、場合によっては持ち出しかもしれないけれども参加するのはなぜかが知りたい。そういう意味では、ボランティア活動を調べるのは私のイメージとしてもないのです。本当にいろいろな意味合いで参加していると思いますし、先ほど藤田委員がおっしゃったように、多様性の中でのいわゆる社会的な参加として考えていいかなと思っています。

藤田委員：それから、例えば、ネット上のポータルサイトのようなものがあって、川崎で何か参加しようと思ったらそこにアクセスするといろいろあると。今の川崎の良いところを探すのであれば、このツイッターサイトに行くと、今何を募集しているかがわかって、それでどのツイートが一番多いかがわかる。そういうのがある一方で、川崎の防災活動はどうなっているのか、何をやっているのかがわかる。いろいろな手段、程度での社会参加というのがそこにアクセスするとわかる、そんなサイトがあるといいと思います。

事務局：先ほどのカワサキハロウィンもそうですけれども、若い子たちに興味を持ってもらう仕掛けをつくっているのは民間のエンターテインメント会社です。行政は、しっかりこういうことをやるということをがっちり決めて事業の施策にするので、それだと何となくおもしろみがなくなって若者に食いついてもらえない、そのところは多分難しいかなという気がします。したがって、やるならば見てもらえるような何かしらのうまい仕組みを一緒にやってくれるパートナーをどうやって見つけていくかというのがすごく大切です。

岡田会長：そんなサイトをつくるとしても、実際の運用は、NPO団体などやってくれるところに委託することになるだろうと思いますが、川崎の若者ネットみたいなものができれば、先ほどおっしゃったように、学校の情報や、さまざまな子育て情報、社会参加の情報がまとまって載せられますね。

香山副委員長：副委員長として、委員の皆さんの思いを伺いながら、事前の協議テーマ案を少し変えてたたき台を考えていました。タイトルは、「現代に生きる青少年の主体的な社会参加を考える」。サブタイトルとして、藤田委員の意見を踏まえて、「多様性、包括性、継続性を軸に据えて」。実はその前に、主体的な参加形態の可能性、とかいろいろな文言で考えましたが、そうするとまた参加形態がどうか、可能性に絞るのはどうか、という意見が出そうなので、極力シンプルに。これをたたき台にして、またそこから皆さんの意見をいただければ、と思います。



岡田会長：今、副委員長のほうから案が出たのでそれでいいと思いますが、そういった多様な活動を誰がつくり出すのかという側面があってもいいのではないかと思います。それから多様な活動なのか地域活動なのかわかりませんが、その創発と何々を促すとかという名にすると、そうするとここの議論でそれぞれがいろいろ挙げてきたものを1つずつセッションにして、これなら創発というのがさっと考えられるのではないかと思います。

芳川委員長：そろそろ終わり時間が近づいてまいりました。イメージとして、まだこれは具体的なものということではなくて、全体会のときに大体このテーマの方向で、という感じで出そうと思うのですが、「現代を生きる青少年の社会的な参加を考える」という形で、今日出てきたキーワード、包括性、継続性、多様性。それらを副題にして考えて展開していくことにします。

## (2) その他

- ・なし。議事を終了。

## 3 閉会

- ・第2回全体会は、3月20日（水）午後2時から開催する。開催通知は後日送付予定。